

## 印象に残った3つの言葉～

、「何かおかしい」、「真実が知りたい」

「自分が折れないようにやっていくことが大事」

木村 敦子

お話を伺って、3つの言葉がとても強く印象に残りました。それは、「何かおかしい」、「真実が知りたい」「自分が折れないようにやっていくことが大事」です。実は、これらの言葉は私の心のなかの言葉と同じだったのです。

まずお母さまの死について、病院側から話されたことに「何かおかしい」と感じられ、川田先生は、本を読んだりして、ご自分が納得できる答えを求めて静かに行動されています。

人は、何かについて疑問に思ったときに、はじめに浮かぶ言葉は、きっと「なぜ？」という言葉ではないでしょうか。同じように、五感を通して「何かおかしい」と感じる、それは大切にすべき感覚ではないかと思うのです。

人間は、すべてを論理的に考えて行動しているわけでもありませんし、また言葉のままに物を理解しているわけではないと思うのです。持って生まれた個々の人がもつ感覚のようなものを通して理解し、また感じ、考えて、そして無意識のうちに行動しているのではないのでしょうか。ですから、私は「何かおかしい」「なぜ」と疑問に思うことを大切にして、それを深めていくことが大事だと思うのです。

死生学者アルフォンス・デーケン氏の生と死を考える活動に、長い間、かかわってきたきっかけも、父が食道がんの診断を受け、説明をしてくださった医療者の態度、言葉に対しての「何かおかしい」、「信用できない」、「なんとかしなくてはならない」、だったのです。

28年も前ではありましたが、サードオピニオンまで取って、父を説得して手術に踏み切りました。当時はまだがんの告知もされていない時代でしたから、一人父にも言えず、悩みつつ最善と思われる選択をしたのです。

そのときから比べれば、医療の技術も医師の意識も変わったとは思いますが。しかし、医療を受けるに当たって、まだまだ患者中心とは言えないように思います。昨年、夫が前立腺ガンと診断されたときも、結局、医師の説明に「何か変よ」と感じ、またもやサードオピニオンまで取って治療しました。今後も医

療の良心を求めて活動していく必要があるように思います。

次に「真実を知りたい」という言葉についてです。

生と死を考える活動を通して、さまざまな方々に出会いました。そのなかには医療ミスによりご家族を亡くされた方もいます。その遺族の方がしばしばおっしゃる言葉が、「真実を知りたい」でした。

川田先生の講義の中で、「隠さない、誤魔化さない、嘘をつかない」ということがとても大切だと言われましたが、まさしく医療ミスについても、これらの言葉が当てはまります。遺族の怒りの大半は、医療ミスを隠されたり、誤魔化されたり、嘘をつかれたことに対するものです。これらの偽りがなければ、どんなにか遺族のグリーフは穏やかになり、もっと立ち直るための道もスムーズではないだろうかと思います。怒りがおさまるまで、本当に長くかかります。

三番目の「自分が折れないようにやっていくことが大事」は、生き方として共感できるのです。人は一人で生きているのではないですから、まわりの人とのかかわりのなかで、無理なく、自分のペースで頑張りすぎずに歩むことも大切だと思います。

つい何かに向かって突っ走ってしまったり、無理をしてしまうと、結局は家族やまわりの人に大きな負担をかけたり、迷惑をかけてしまいます。物事を短期間のうちに終わられるものもありますが、いつ終わられるか、わからないものもあり、長期にわたってかかわっていくこともあります。これまでの経験を通して、同じように思うのです。

お話のなかで、同じように思ったことが多々ありました。

例えば、テレビは怖い、被害者団体って怖い、情報や映像が一人歩きするなど、どれも私が仕事を通して感じたことです。まるで私が常々思っていたことを代弁してくださっていたように感じました。これまで心のなかで思っても、言っていないのかしら、と考えて、誰にもお話ししたことがなかったのです。

守ってくださる方がいるということは大事なことなのだとも思いました。今後、ますますのご活躍を応援しています。